

悪霊、ひれ伏す

2020/3/1

シリーズ～福音の力～

ルカによる福音書8章26～39節

一行は、ガリラヤの向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。イエスが陸に上がられると、この町の者で、悪霊に取りつかれている男がやって来た。この男は長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた。イエスを見ると、わめきながらひれ伏し、大声で言った。「いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい。」イエスが、汚れた霊に男から出るように命じられたからである。この人は何回も汚れた霊に取りつかれたので、鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それを引きちぎっては、悪霊によって荒れ野へと駆り立てられていた。

イエスが、「名は何というか」とお尋ねになると、「レギオン」と言った。たくさんの悪霊がこの男に入っていたからである。そして悪霊どもは、底なしの淵へ行けという命令を自分たちに出さないようにと、イエスに願った。ところで、その辺りの山で、たくさんの豚の群れがえさをあさっていた。悪霊どもが豚の中に入る許しを願うと、イエスはお許しになった。悪霊どもはその人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れは崖を下って湖になだれ込み、おぼれ死んだ。この出来事を見た豚飼いたちは逃げ出し、町や村にこのことを知らせた。そこで、人々はその出来事を見ようとしてやって来た。彼らはイエスのところに来ると、悪霊どもを追い出してもらった人が、服を着、正気になってイエスの足もとに座っているのを見て、恐ろしくなった。

成り行きを見ていた人たちは、悪霊に取りつかれていた人の救われた次第を人々に知らせた。そこで、ゲラサ地方の人々は皆、自分たちのところから出て行ってもらいたいと、イエスに願った。彼らはすっかり恐れに取りつかれていたのである。そこで、イエスは舟に乗って帰ろうとされた。

悪霊どもを追い出してもらった人が、お供したいとしきりに願ったが、イエスはこう言ってお帰しになった。「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになされたことをことごとく話して聞かせなさい。」その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。

悪霊に取り憑かれた男

- イエス様は弟子に命じて船に乗り、ガリラヤ湖を渡って「ゲラサ人の地」に來られた
 - ゲラサ人の地は湖の南岸で、異邦人が住んでいた（汚れた動物である豚を飼っていた）
- 悪霊に支配され誰もコントロールできなかった
 - 「長い間、衣服を身に着けず、家に住まないで墓場を住まいとしていた」
 - 「鎖でつながれ、足枷をはめられて監視されていたが、それを引きちぎっては、悪霊によって荒れ野へと駆り立てられていた」

なぜ福音書には悪霊の話が多いのか

- 原因の分からない症状は悪霊の仕業だと考えられていた
 - 例：狂犬病・てんかん発作・**伝染病**など
 - 目に見えない得体の知れないものへの恐怖
- 悪霊の働きが盛んだった
 - 神の御子がこの世に来られたので、悪霊たちもささやかな抵抗を試みた
- 今でも悪霊は人に取り憑くのか？
 - イエス・キリストを主として受け入れている人には近づくことすらできない！

悪霊、ひれ伏す

「イエスを見ると、わめきながらひれ伏し、大声で言った。『いと高き神の子イエス、かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい。』」

- 悪霊はイエス様をよく知っていた

- 「いと高き神の子」だと告白？した

- 悪霊はイエス様を恐れた

- わめきながら**ひれ伏し**、大声で命乞いをした

- 「かまわないでくれ。頼むから苦しめないでほしい」

- 「底なしの淵へ行けという命令を自分たちに出さないようにと、イエスに願った。」

追い出された悪霊

- この男には多くの悪霊が取りついていた
 - なぜイエス様は悪霊の名前を聞かれたのか？
 - 「レギオン」とはローマの大隊(六千人ほど)の意
- 悪霊どもは「底なしの淵」へ落とされることを恐れ、豚の中に入ることを願った
 - イエス様が許されたので、悪霊たちはこの男から出て行き、豚に取り憑いた
 - 悪霊が豚に入ると、豚は崖を下って湖に落ちた
- この地方の人たちはイエス様を恐れた
 - イエス様に出て行ってもらいたいと願った

家に帰って証ししなさい

- 正氣に戻った男

- 「服を着、正氣になってイエスの足もとに座って」
- 悪霊の支配から解放された
- 「お供したいとしきりに願った」

- イエス様は一緒に行くことを許さなかった

- 「自分の家に帰りなさい。そして、神があなたになさったことをことごとく話して聞かせなさい。」
- 「その人は立ち去り、イエスが自分にしてくださったことをことごとく町中に言い広めた。」

ウィルスの恐怖に取り憑かれた人々

- 今世界はウィルスの恐怖に取り憑かれている
 - 目に見えない得体の知れないものへの恐怖
- イエス様は私たちを死の恐怖から解放された
 - 「ところで、子らは血と肉を備えているので、イエスもまた同様に、これらのものを備えられました。それは、死をつかさどる者、つまり悪魔を御自分の死によって滅ぼし、**死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあった者たちを解放なさるため**でした。」ヘブライ2:14-15
- すべてのものはイエス様の前にひれ伏す！
 - 「キリストは、万物を支配下に置くことさえできる力によって、わたしたちの卑しい体を、御自分の栄光ある体と同じ形に変えてくださるのです。」フィリピ3:21

武漢在住の牧師の手紙から

この町で私たちが疫病に直面している時、キリストも私たちと共におられます。疫病(コロナウィルス)は私たちに害を与えることはできません。同時に、**私たちが疫病の中で死ぬなら、それはキリストを証しする機会であり、さらにキリストの栄光に入る機会です。**

ですから兄弟姉妹の皆さん、キリストの愛によって強められてください。この疫病で死と福音を深く理解する時、私たちはキリストの愛をより深く経験し、より神を近くに体験することができます。

武漢市に住む中国人牧師（匿名）から、世界中のクリスチャン宛てた手紙（抜粋）

兄弟姉妹の皆さんに平安がありますように。

ここ数日、ウイルスが私の生活と思考の中心でした。常にニュースをチェックし、家族と教会がこれにどう向き合えばよいのかを考えています。家族のためにはマスクと食料を集め、外出は極力控えています。教会については、皆の安全を確保しながらも、この厳しい状況の中、忠実な証人であるためにどうすれば良いかと考えています。こうしたあらゆる思いが混じって葛藤しています。私たちはまさに信仰の試練に直面しています。

危機的な状況ではありますが、私たちは主の約束に信頼しています。私たちに対する主の思いは災いではなく平安であり（エレミヤ 29：11）、私たちに試練の時を許し、滅ぼすのではなく私たちを建て上げてくださいます。ですからクリスチャンは、町の人と共に苦しむだけでなく、恐れている人々のために祈り、イエス・キリストの平安をもたらす役目があるのです。

まず、キリストの平安が私たちの心を支配しますように（コロサイ 3：15）。キリストはすでに私たちに平安を与えてくださっていますが、それは災いと死を免れることを意味するのではなく、むしろその真ん中にあっても平安だということです。キリストが既に病や死に勝利してくださいましたから（ヨハネ 14：27、16：33）。もしこの平安がなかったなら、疫病を恐れ、死に直面して希望を失うことでしょう。

なぜ私たちは平安を持つことができるのでしょうか。主は「悪しき者には平安がない」（イザヤ 48：22）と言われました。私たちはかつてみな罪人で、平安がありませんでした。しかしキリストが、私たちの罰を身代わりに受けてくださり、ご自身の平安を与えてくださったのです。クリスチャンは地上において苦しみに直面するかもしれませんが、その苦難は罰ではありません。むしろ全能者なる神の御そば近くで成長し、たましいの不純物を除き、福音を宣言する新しいチャンスなのです。

言い換えれば、災害に遭ったとしても、それは神の愛の現れに過ぎません。パウロが固く信じていたように、「誰がキリストの愛から私たちを引き離すで

しょうか。苦難、苦悩、迫害、飢え、裸、危険、剣ですか……これらすべてにおいても、私たちを愛してくださった方によって、私たちは圧倒的な勝利者です。死も、命も、御使いも、支配者も、今あるものの、後に来るもの、力も、高さも、深さも、その他のどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から私たちを引き離すことはできません」（ローマ 8：35～39）

今の状況で言うなら、武漢の疫病はキリストの愛から私たちを引き離すことはできません。この事実は、私たちにとって本当に慰めです。私たちは既にキリストと一体なのですから。私たちはキリストの苦しみの一部にあずかり、栄光の一部にもあずかります。キリストのすべては私たちのものであり、私たちのすべてはキリストのものです。だから、この町で私たちが疫病に直面している時、キリストも私たちと共におられます。疫病は私たちに害を与えることはできません。同時に、私たちが疫病の中で死ぬなら、それはキリストを証しする機会であり、さらにキリストの栄光に入る機会です。

ですから兄弟姉妹の皆さん、キリストの愛によって強められてください。この疫病で死と福音を深く理解する時、私たちはキリストの愛をより深く経験し、より神を近くに体験することができます。私たちのキリストは比類なき死の苦しみを通りましたが、神は彼を死からよみがえらせ、右の座に上げられました（使徒 2：32～36）。

私たちが今経験しているのは、アブラハムがソドムと、ヨナがニネベと向き合っている状態ではないでしょうか。神が一人の義人（アブラハム）のゆえにソドムに対するさばきを差し控え、また右も左も分からない 12 万人のニネベの人々のために破壊を差し止めたのなら、私たちの住む武漢市はどうなのでしょう。私たちはソドムのために真剣に祈ったアブラハムの方でしょうか（創世 18：23～33）。ヨナは非常な困難を覚えつつもニネベに福音を伝えました。それによってニネベは悔い改め救われました。

私たちはこの町のアブラハムとヨナです。この町の上に神のあわれみを祈り、私たちの祈りと証しをもってこの町に平和をもたらさなければなりません。これが、武漢に住む私たちに呼び掛けておられる神

さまの召しだと私は信じています。私たちはこの町の平和を求め、病気に苦しむ人々、最前線で闘っている医療関係者、あらゆる階層のすべての政府関係者、武漢のすべての人の平和を求めましょう！ オンラインを通じて友人や愛する人に福音を伝え、私たちの命は私たちの手の中に無いこと知らせ、神に命を委ねることができることを伝えましょう。

この数日間、私は世界中の牧師から武漢の様子を尋ねられました。彼らも世界中の教会も、この町のことを、そして何よりも私たちのことを心配してくれています。この疫病の流行に立ち向かい、私たちと共にこの町のためにとりなしてくれています。私は彼らに頼みました。特に、「キリストに目を向けてください」と。私の幸せを心配したり、動揺したり、恐れったりしないで、イエス・キリストの名によって祈ってください。

善良な人々が、特に医療関係者が、自分たちの命を危険にさらしてこの町のために労しています。彼らがそのようにこの世の責任を引き受けることができるのなら、私たちは霊的な責任を進んで引き受けずにはられません。もしあなたが祈る重荷を感じることができないなら、愛に満ちた心を、熱心に祈る心を主に求めてください。私たちは確信しています。この町が救われるのは、主のあわれみという希望を通してのみなのです。

(ChinaSource1月28日掲載)